

論文の内容の要旨

論文題目 植民地作家翁^{オウドウ}閼再考——1930年代の光と影

氏名 黄 毓 婷

本稿では、日本という異郷で生きた台湾文学者として、翁閼（オウ・ドウ）を取り上げる。翁閼はかなり洗練された日本語で数多くの作品を残した。それらのほとんどが、1934年の上京後に書かれたことから考えるならば、翁閼の文学は1930年代の都市東京および同時代文学のコンテクストの中で読まれてしかるべきだが、今までの翁閼論は植民地の文学史に固執するあまり、日本の同時代の文学についての認識を欠いている。翁閼という台湾人の足跡をたどることによって、従来日本や台湾でそれぞれに記述されてきた歴史を、有機的に結びつける可能性が見出せるのではないかと考える。

翁閼は闊達な日本語で凡ての創作活動を行っており、作品の質の高さと技法の巧みさは当時の台湾文壇においては稀に見るものだった。それだけに一層、文壇に登場して間もなく、夭折してしまった翁閼は、あたかも幻のような存在として語られる。故に日本で文学賞を得たという噂を含め、翁閼にまつわる数々の伝説は、検証もされないまま、長年言い伝えられてきた。本稿では、「文藝第二回懸賞創作入選発表」の記事を確認した上、翁閼にまつわる賞が、何れの文学賞でもなく、「改造（社）」の賞であったと強調された背景には、朝鮮作家張赫宙が『改造』の懸賞創作に当選し、植民地の作家志望者を大いに鼓舞したことがあると論じた。そして、翁閼に「モダン作家」、「新感覚派作家」という評価が与えられる出発点となる、同時代作家劉捷の証言を検証した。劉捷の証言の中に三度も出現する「純文学」という言葉の意味は、1930年代の「純文学」が自己区別しようとする対象とともに捉えなければならない。劉捷がいう「純

文学新感覚派」という聞き慣れない言葉の内実を問うことなく、それはプロレタリア文学の対極とするばかりの曖昧の「感覚」で鵜呑みにしたことに、今までのモダニズム偏向の翁闢論の問題があると指摘した。

上京後初めて発表した作品「東京郊外浪人街」において、翁闢は高円寺界限に流れる自由放縦な雰囲気を情熱的に語っている。本稿では、この作品で言及した文士の実名を手がかりに翁闢の伝記的な事実を確認しながら、当時の東京郊外、とりわけ高円寺駅を中心に、なぜ「浪人街」という特殊なトポスが成立したのかについて論じた。「高円寺界限」という場はすでに文学的記述や同時代の人々の回想録において散見され、あたかも明確な境界を持つ空間のごとく扱われているのである。調べによると、1930年代の大弾圧の下で姿を消していたプロレタリア作家やアナキストたちの棲家は、中央線沿線の中でも西の荻窪や阿佐ヶ谷より、杉並区の高円寺と新宿に近い淀橋区に集中していたことがわかる。必ずしも地理上の「高円寺」周辺とは一致しないにもかかわらず、「高円寺界限」はそうした浪人達によって初めて社会的な空間として現れ、その空間の想像的位相も彼らの「浪人風情」に付与されるのである。

「東京郊外浪人街」に現れる「落ちぶれ」の意識は、翁闢が上京してからの心境の変化を示し、その後の創作方向にも影響を及ぼしていた。「モダン作家」という評価とは裏腹に、実際に翁闢が発表した七篇の小説のうち、農村を背景にしているものが三篇もあることから、翁闢におけるこの題材の重要性が分かるはずである。本稿では、今まであまり注目されなかった翁闢の「農村物」を扱う。まず、日本文学における「農民文学」というジャンルの変遷をたどることによって、三十年代に入って突如現れた「農村文学田舎文学の氾濫」という現象に光を当てる。今までの日本文学史の中でもあまり関心が払われていなかったこのジャンルに注目することによって、当時の政治的、社会的な状況がいかんして文学の一時期の現象を作り上げたのかを明らかにする。そこで、三十年代の農民文学は、それまでの農民文学とは本質的に違うものであることを改めて提起したい。

翁闢の「農村物」を三十年代の農村文学の風潮において検証すると、彼が同時代の関心に呼応していることが分かると同時に、同時代の評論家が彼の作品に求めていたものも見えてくる。本稿では、これらの「翁闢論」がそれぞれの評論家の思想的な傾向をあらわすだけでなく、同時代の内地（＝日本）の特定の陣営に見られる共通のキーワードの使用から、農村を描く文学についての同類の論評が植民地出版物においても再生産される現象を指摘する。その上で、翁闢の作品「戀爺さん」、「哀れなルイ婆さん」を詳細に読み直していく。翁闢の「農村物」は、台湾農村の貧しい現実を念入りに盛り込んで構成された物語ではあるが、現実の悲惨さを一方的に強調することはない。読者の道徳的憤激を喚起する目的があるとしても、そのような現実を救済する思想などを安易に提供することはなかった。そして、小説における方言の巧みな使用が目につく。しかし、翁闢が使用する方言は、1930年代の日本文壇で「氾濫」していた農民文学における方言の多用の風潮とは同列にすることはできない。というのは、彼の作中人物達が操っている「方言」は、台湾の農村で覚えることのできない日本語圏の地方の言葉なので

ある。日本語で枠付けした小説の中で、登場人物が台湾語の代わりに日本語圏の方言を操っているという構造からみると、日本語とは別個の起源を持つ「台湾語」が、ここで日本語の低位区分である「台湾方言」のように仕立てられ、小説の中の台湾農民が日本語（標準語であれ方言であれ）を話す瞬間、それ自体がフィクショナルな存在に化してしまう。言葉の次元において換骨奪胎された現実にはもはや現実のままではいられないのだ。

1937年1月に発表された「夜明け前の恋物語」は、従来の研究ではモダニズムの代表作とされていた。本論文では、あえてモダニズムの議論の枠組みを切り捨て、この作品が発表された前後の時空について探求することを試みた。左翼に対するものを始めとして1930年代は総じて強力な弾圧が存在するが、1930年代の後半になると、「総動員」という言葉が象徴するように、個体が総体の一部と化し、私的な領域へのさらなる政治力の干渉が強まっていった。同時代のシレストフの受容から、漠然とした不安の感覚は1930年代における多くの日本知識人に共有していることが見受けられるのである。「夜明け前の恋物語」というタイトルは、その前年に出された島崎藤村『夜明け前』の人気を踏まえてのものではあるが、テキスト自体は独りよがりの自閉的な言語空間となっている。「夜明け前の恋物語」では、語り手の「ぼく」の下り坂を転がり落ちてゆくような生が新たな可能性を打開するすべを見失い、「ぼく」は31歳になったら生命を断ちたいと述べている。この作品が発表された1937年1月の時点では、翁闢は26歳だった。戦争へ駆け足で走っていく時代で、つかの間の恋を結実しようと願望しつつ、心ならずも自分の無能を露呈する「夜明け前の恋物語」は、去勢の一つの形式とも読めるのである。

論文の最後では、近年新しく発見された詩作「征け勇士」と連載小説「港のある街」について論ずる。1938年『台湾新民報』に発表された「征け勇士」において、「国民」に「くにたみ」と一つ一つ振り仮名が付され、「祖国」、「旗の波」、「喇叭」、「熱情」の言葉が繰り返し現れ、昂揚した感情を感じさせるところに戦争翼賛の詩歌のパターンがある。しかし、同じ戦争下といえども、日本内地と植民地がそれぞれ歩んできた歴史を考え合わせてみるならば、違和感を払拭することはできない。というのは、詩作が発表された時点で、台湾人は「天皇の赤子」として兵役にあたることはまずなかったのだ。そうすると、一見、明白な決まり文句で戦意の昂揚を鼓舞する「征け勇士」は、台湾人読者に読ませると、自分たちが「クニタミ」から分別されていることがかえって浮き彫りになるのである。戦争の主体は、「^な ^{とほつみおや} 汝が祖先」を共有する人間、いわば「われわれ」と「ソセン」を共有しない単なる「汝=あなた」なのだ。「愛国心」を総動員するはずの翼賛詩歌が、一転して日本と台湾、支配者と植民地民の分化を引き立てたのである。

翁闢生涯の最後の作品「港のある街」について、戦前の新聞、地図、郷土史資料および観光案内書を調べた結果、「港のある街」の至るところに神戸の地理的・歴史的な縁に沿って切り取られた痕跡が存在することを解明した。「港のある街」に潜むもっとも重要な事実、主人公の谷子の育った「風呂ノ谷」という場所が神戸の被差別部落だったことである。風呂谷とい

う場所の帯びた歴史的・記号的な意味合いにおいて意図されていたことを確認しておく必要がある。そして、感化院から脱走した谷子を庇護し、後に谷子の「ムラサキ・バー」によって引き継がれた「紫団」も、1911年に実在した不良少年団体であり、小説における「紫団」の任侠的なイデオロギーは谷子の復讐によって体現されている。ここに、翁鬧が新聞小説「港のある街」によって、通俗文学作家へ転じる試みが見られるのであるが、早世によって作家としての可能性は閉ざされてしまったのである。